

入れこまれているのがわかる。

結論的に言えば、ワイルドを翻訳するばあい、以上のような諸問題に十分留意することがまずもって必要なのではないであろうか。

## ワ イ ル ド と 翻 訳

木 村 克 彦

(作新学院大学助教授)

芸術の一形式に音楽がある。西洋音楽に幼少から親しんできた私たちは、日本の音楽よりも西洋のそれに、違和感なく親しみを覚えたとしても不思議はなかろう。ここで翻訳の問題を考えると、音楽の中でも「歌曲」という形式に注目してみたい。

私たちが西洋の歌曲に接するとき、その歌詞の意味が、外国語であるが故に分からない場合がある。そのようなときでも、その歌曲の芸術的意味は、伝わるのか否か……ごく有り体に言ってしまうと、ある程度は伝わる——が、歌詞の意味が分かれば、その理解は、より深くなる——と考えるのが常套であろう。しかし本当に「より深く」なるのか。また全く逆から見て、歌詞の意味さえ分かれば、その楽曲の音楽的意味は、十全に理解され得るのか。もし歌詞の日本語訳が分かることによって、真に「より深く」なるのであれば、それが分からないままに経験し得る深甚な音楽的感動は何物なのか。ワイルドは、「芸術家としての批評家」において言う。

あらゆる芸術が訴えかけるのは、専ら芸術的気質に向かつてである。芸術は専門家を相手にしない。芸術は普遍的であり、どんな形で現われようとひとつであるというのが、その主張である。

無論、ここで言う「芸術的気質」とは、音楽的感性だけでなく、文学的気質、日本語・外国語に対する感覚をも含むであろう。そして翻訳というものは、この芸術的気質を感化するのに手を貸してくれることは、疑いない。しかしワイルドが「芸術は専門家を相手にしない」と言うように、翻訳という作業が究極の終着点ではないように思われる。歌曲の例を再び引くなら、ある歌曲の、旋律や和声の方は実に美しく芸術的であるにも拘らず、歌詞の方が然程でもない例が、いくつかある。因みにシューベルトが、ハイネの詩にもっと早く出会っていればとは、よく言われることである。しかし、たとえ詩が稚拙であらう

と、歌曲の王の音楽的卓越さは、寸分も損なわれることはないようだ。また仮に、ある人がある歌詞を完璧に和訳し得たとしても、その歌曲の音楽を全く理解できないうとしたら……その人にとって、その歌曲・芸術は何の意味も持たぬ。ワイルドの言から、このことを改めて確認したい——「芸術の目的は、ただある気分を創り出すことにある」（「芸術家としての批評家」）——私たちは芸術の受容の段階において、芸術的気質を養うことに主眼を置くべきなのだ。即ち、「翻訳史」イコール「受容史」と断定はできないのである。無論、そうは言っても、私はその価値を徹底も損おうとするものではない。翻訳の対象に、ワイルドを選ぶということのみにさえ、芸術的気質が必要とされ、そこにはワイルドの言う批評能力も介在すると思われる。「芸術家としての批評家」において言う。

批評家は批評を頼まれた作品を通読していないと言われることがあるが……ある本が何らかの価値があるか全然ないかを言うのは半時間で充分過ぎるくらい充分なはずだ。ものの十分もあれば充分だ、形式をつかみとる本能さえあれば。

芸術的気質があればこそ、ワイルドを訳出するのである。逆ではない。批評眼・芸術的気質を介された翻訳は、私たちのそれへと、直接に訴えかけてくれるであろう。優れた母国語の形を、私たちの血肉と化した母国語の形をとっているが故に、翻訳は私たちの芸術的気質に直に訴えかけ、新たな気質をも形成するのだ。丁度、美しい音楽が私たちの聴覚に、演奏家を通し直に響き渡るように。演奏家は優れた技巧と芸術家の気質を有しているが、優れた翻訳家も同様だ。芸術的気質ばかりでなく、技巧というものが——外国語を優れた日本語に移し換える過程には語彙力や文法力を土台とした一種のテクニック・技巧が必要であろうが——技巧があって初めて表現され得る芸術的気質もあろう。他ならぬワイルド自身、「芸術家としての批評家」において次のように言う。

しかし技巧の方はどうなのか？ どの芸術も確かに、それぞれ特有の技巧を持っているのでは？

確かに。どの芸術にも独自の原理と独自の材料がある。……技巧とは実は個性なのだ。

芸術的気質と技巧・個性を兼ね備えた翻訳こそ、真の翻訳であると思われる。私たちに真の気質を発見させ、文化の受容という歓びを齎してくれるもの——それは「芸術としての翻訳」に他ならない。